

# 結婚をモチーフとするチェーホフの ヴォードヴィル

——先行作品等との関係——

齋 藤 陽 一

## はじめに

チェーホフの演劇作品には、結婚をモチーフとするものが多い。いわゆる「四大戯曲」と呼ばれる作品の中でも、『かもめ』は本人が「5プードの恋」<sup>i</sup>（がある）と述べているように、もともと恋愛が芸術とともにテーマの一つとされているので、結婚がモチーフとして出てくるのも当然かもしれない。また、ノースロップ・フライも述べているように、「シェイクスピアの喜劇も含めて、ルネサンス期の大部分の喜劇には、その核心にプラウトゥスやテレンティウスの新喜劇から継承されたひとつの定式が」あり、最後には、「障壁を巧みにくぐり抜けた二人の結婚、あるいは婚約によって新しい社会が誕生する場面で喜劇が終わるのが普通」<sup>ii</sup>でもあるらしいので、チェーホフの演劇作品の中に結婚の

<sup>i</sup> チェーホフは1895年10月21日のスヴォーリン宛ての手紙で『かもめ』の内容について語り、その中によく知られているように「5プードの恋」という言葉が書かれている。勿論、必ずしも恋と結婚が併存する訳ではないが、『かもめ』には確かに結婚というモチーフが現れている。

A.П.Чехов Полное собрание сочинений и писем в 30-ти томах Письма Т.6 ст.85 なお、今後この全集からの引用の場合は、著作（С.）か書簡（П.）かの記号と巻数、ページ数のみを記す。

<sup>ii</sup> この二つの引用が関連する部分全体を引用しておく次のようになる。

「シェイクスピアの喜劇をも含めてルネサンス期の大部分の喜劇には、その核心に常にプラウトゥスやテレンティウスの新喜劇から継承されたひとつの定式がある。その典型的な物語の筋展開は、ある若者がさまざまな社会的障壁——女性の素姓が悪いとか、彼の財産が少額であるとか、不足しているとか、親の反対に会うとか、すでに恋敵が結婚を申し込んでいるとかといったものであるが——ゆえに引き離されている恋人と多くの苦悩の末に結ばれるまでを描いたものである。最後には、このような障壁を巧みにくぐり抜けた

モチーフが出てくるのも、不思議ではないのかもしれない。作家自身は、自分の戯曲が喜劇であったり、ヴォードヴィル性を持っていると考えていた訳であるから。それでは、実際にチェーホフの場合は、結婚のモチーフがどのように用いられているのか、初めに、この観点からロシア演劇の流れを簡単に振り返りつつ、その特徴を考えてみたい。

## ロシア演劇における結婚のモチーフ

ロシア演劇における著名な作品では、1782年に初演されたフォンヴィージンの『親がかり』において結婚のモチーフが見られる。古典主義の時代の作品で、三単一の法則に則って書かれており、ヒロイン、ソフィヤのそれまで死んだと思われていた伯父、スタロドゥームが現れるという展開や、すぐれた賢い娘に成長したソフィヤをミトロファンとスコチーニンが争うところなどは、モリエールなどを思わせるところもある。19世紀以降の作品では、結婚が失敗に終わったり、失敗した結婚生活から物語が始まるものも多くなるが、この作品では、ソフィヤが愛するミーロンの助けもあり、彼女と結婚しようと焦っている二人の男から逃れることができ、ミーロンとの結婚が予想されるところで終わっている。その意味でも古典主義時代の特徴が現れている作品であると言えるだろう。

19世紀に入って、結婚のモチーフが見られる著名な作品は、まず、グリボエドフの『知恵の悲しみ』が挙げられるだろう。この作品は、作者の死後、1831年に初演されているが、その主人公、チャーツキイは、19世紀ロシア文学を貫くテーマとして有名な余計者のはしりとされる。その相手は、彼の幼なじみであった、『親がかり』のヒロインと同じ名前のソフィヤであるが、こちらは、賢いとは言えない。冒頭、早朝の寝室で父親の秘書であるモルチャーリンと二

---

二人の結婚、あるいは婚約によって新しい社会が誕生する場面で喜劇が終わるのが普通である。新しい社会の誕生は、結婚式や祝宴、あるいは舞踏会などを特徴とする最後の祝祭的な場面によって象徴される。」ノースロップ・フライ『シェイクスピア喜劇の世界』石原孝哉、市川仁訳 三修社 2001年 108頁

人でいて、小間使いのリーザをやきもきさせるシーンは、『ロミオとジュリエット』のパロディかとも思わせるが、モルチャーリンは、後に、観客の前でもあろうに小間使いのリーザをくどくというシーンを見せる。とてもロミオに値する男ではない。結局、時代に先駆けた性格を持つチャーツキイはソフィヤとの結婚は諦め、ロシアを去って行く。しかも、偶然により、彼がソフィヤと夜二人きりで見とがめられ、ソフィヤがあらぬ疑いをかけられ叔母のところやられるというエピソードまでである。余計者としては、ツルゲーネフの主人公達やオブローモフなどと比べて、行動力があり、また、ヒロインの方がそれほど純粋ではないという特徴が見られる。

ロマン主義時代における結婚のモチーフを含む傑作は、レールモントフの『仮面舞踏会』ではないだろうか。作者の死後、1842年に初演されたこの作品では、嫉妬にとりつかれて妻を毒殺するという男アルペーニンが描かれている。いかにもロマン主義的な筋書きの戯曲ではあるが、妻への疑い、即殺人という主人公の行動は、あまり類を見ないものかもしれない。結婚というモチーフとしては「失敗した結婚」という観点から考えてよいのではないだろうか。

ほぼ同じ時代に活躍したゴーゴリになると、『検察官』の中に、主人公フレスタコフが首都から派遣された検察官<sup>iii</sup>であると誤解され、市長の妻とその娘の両方から迫られるというシーンがある。最終的には、フレスタコフが娘の方に求婚するという形で決着するが、二人きりである部屋にもう片方が急に入ってくるという第4幕に見られるシーンなどは、伝統的な喜劇の手法に則っているだろう。また、結婚により、よりよい暮らしが手に入ると考えるところは、モチーフとしては『親がかり』とも共通するところがあると考えられる。

また、ゴーゴリにはもう一つ、その名も『結婚』という『検察官』よりは知られていない作品がある。簡単にあらすじを述べておきたいが、主人公ポドゥコリョーシンは仲人を仕事とするフォークラと友人のコチカリョーフの後押し

<sup>iii</sup> 題名が『検察官』と訳されることが多いので、このようにしておくが、実際には司法制度の検察官というよりは、地方行政を監察する人間のことを指している。そのため浦雅春は『査察官』と訳している。

で結婚をしようとする。紹介されたアガーフィヤの所に行ってみると、彼女を結婚相手と考えて何人もの男がやってきていた。そうしたライヴァル達に友人のコチカリョーフはアガーフィヤの悪口を吹き込み、次々と去らせる。そして、ついに一人残ったポドゥコリョーシンのことを褒め称え、それによりアガーフィヤは結婚しようという気持ちになる。ポドゥコリョーシンの方も、ついに結婚する決意を固める。ところが、ウェディングドレスに着替えるためにアガーフィヤが席を外し、コチカリョーフも用事を済ませるために出て行き一人になったところで、ポドゥコリョーシンは急に不安になり、窓から外に飛び降り、結婚は成就しない。ヴォードヴィル的な作りのこの作品をチェーホフは気に入っていたのだが、これについては後述したい。

この次には、ツルゲーネフの作品が続くが、一番よく知られているのは『村の一月』だろう。もともと『学生』という名前で構想され、1869年の著作集に収められた版が、現在刊行されているものとほぼ一致している。現行の『村の一月』では、すでに結婚している地主の妻、ナターリヤが、息子の家庭教師としてやってきたベリヤーエフを恋してしまい、一方、彼女の養女、まだ十代のヴェーラも彼に対して恋心を抱き、親子で一人の男性を争うということになってしまう。結婚のモチーフは、争いの終結とともに、ヴェーラがナターリヤから離れるために気に染まぬ結婚を承諾し、屋敷を出て行くというところに現れる。この結婚相手の登場自体がナターリヤの策略で、ベリヤーエフからヴェーラを遠ざけるために持ち出された結婚だったのだが、ベリヤーエフがナターリヤ、ヴェーラどちらの思いにも答えないということが判明した後でも、ヴェーラはこの結婚を承諾したのだった。

ツルゲーネフの作品では、短編小説集『獵人日記』の中に、地主の考え一つで結婚までも決められてしまう農民の姿が描かれていたり、余計者と言われるタイプが登場する中編小説、長編小説の中で、親の勧める結婚が娘を苦しめたり、貴族の男が農民の娘に手を出すなどというモチーフが見られる。そうした貴族の屋敷を舞台に描かれてきた「結婚」の商人版がオストロフスキーの作品であろう。彼の日本で最もよく知られている戯曲、『雷雨』（1859年初演）においては、「失敗した結婚」のモチーフが響いている。ヒロイン、カテリーナは

無理解な姑、さらには自分の母親（つまりはカテリーナにとっては姑）に頭が上がらない夫に囲まれて息苦しい生活を送っている。そして、つかの間、心が通じたポリースとの逢引を楽しむが、けっきょくは自らその「罪」を告白してしまい、ヴォルガ川に身を投げる。また、他の作品では、一家の長が、娘の感情を無視して、まるで自分の持ち物のように娘を嫁にやる家父長制的な姿がしばしば見られる。

トルストイの『闇の力』（執筆は1880年代だが、初演は1895年）は、オストロフスキーの作品に見られる、結婚に関して一家、もしくは家長の利益を優先させる姿勢が、極限にまで達したものであろう。ここでは、虐げられるはずの嫁ですら強欲になり、殺人や生まれたばかりの子供を殺すといった行動すら見られるが、これらはトルストイが「回心」した後の作品であるために、トルストイ主義を説くための舞台装置であるとも考えられる。なお、彼の『生ける屍』という作品も知られているが、この作品の前にすでにチェーホフは劇作を始めているので、この節はここまでとしておきたい。

## チェーホフの四大戯曲の場合

今まで、チェーホフに至るまでの広く知られている作品に絞って、悲劇、喜劇の区別をつけずに結婚のモチーフを確認してきた。それではチェーホフの場合はどうだろうか？ まずいわゆる四大戯曲と言われることのある、『かもめ』、『ワーニャ伯父さん』、『三人姉妹』、『桜の園』について考えてみたい。

四大戯曲の中には、いわば「失敗した結婚」とでも言える夫婦が多く登場する。『かもめ』のメドヴェヂェンコとマーシャ、『三人姉妹』のアンドレイとナターシャは芝居が始まる前には結婚しておらず、メドヴェヂェンコの場合には片思い、後の二人は両思いであったが、結婚後、不幸せな結婚生活を送っている。メドヴェヂェンコは、妻の両親が暮らすアルカージナの屋敷まで何キロも歩いてマーシャに会いくる。彼女は、恐らくは、結婚後も愛するトレープレフがそこにいるために夫とは同居していないようである。また、アンドレイは妻が議長のプロトポーポフと遊びまわっているのを黙って見逃している。

すでに結婚はしているが、相手に不満で、新たな異性に魅力を感じている登場人物も数多くいる。『かもめ』では、メドヴェヂェンコの義母となるポリーナは夫に愛想をつかしドールンに迫り、『ワーニャ伯父さん』のエレーナも恐らく本心は夫に不満を抱いているであろう。『三人姉妹』ではマーシャは夫のクルイギンに愛想をつかし、久方ぶりに出会ったヴェルシーニンと不倫関係になる。そして、そのヴェルシーニンは、自殺騒ぎを起こす妻に満足しているとはとても言えない。さらに、トゥーゼンバフがソリョーヌイとの決闘で倒れたために、その結果がどうなるかは分からないままであったが、愛はないがトゥーゼンバフと結婚しようとしたイリーナの生活が、どのようなものになったかは、保証の限りではない。こうした「失敗した結婚」がいくつも見られるのだが、チャーホフ以前の作品と比較して異なっている点がある。それは、これらの結婚は、決して強いられたものとしては描かれていないということである。マーシャがメドヴェヂェンコと結婚したのは、トレプレフを諦めるためではあるが、決して、強制はされていない。オストロフスキーなどの「失敗した結婚」には、それを生み出す社会への批判に近いものが感じられるが、チャーホフにはむしろ自ら選択したのに失敗したという側面が感じられるのである。さらに、先行する作家の作品では、この「失敗した結婚」のモチーフが悲劇で出てくることが多いのに対し、チャーホフでは、ジャンルにとらわれずにこのモチーフが出てくる。逆に言えば、こうしたことがチャーホフの作品が喜劇、悲劇、どちらであるのかを分かりにくくしているのかもしれない。

また、結婚までは意識していなくても、少なくとも恋愛感情を持っている相手にその思いを伝えられないという人物にもよく出会う。『かもめ』のマーシャは、本来はトレプレフを愛しているが、その愛が報いられることはなかった。『ワーニャ伯父さん』のソーニャのアーストロフへの思いは、エレーナに取り持ってもらったが故に、却って不発に終わっている。そして、『桜の園』のロパーヒンとワーリャの関係は、おそらくは経済的な理由もあって二人が結婚することを勧めるラネーフスカヤにしろ、ワーリャを「マダムローパーヒン」と呼んでからかうトロフィーモフにしろ、認めていた。しかし、4幕の幕切れ近くの二人だけのシーンでは、互いに気持ちを言い出せずに不発に終わる。

こうした四大戯曲における人物像について、浦雅春は次のように述べている。少し長いが引用しておこう。

同じく『三人姉妹』のヴェルシーニンが高らかに二百年、三百年後の生活に思いをはせるが、自殺をはかる妻や幼い子との生活に足を引っばられている。『桜の園』に登場する理想家肌の万年大学生トロフィーモフは若いアーニャに未来の生活を呼びかけながら、ぶざまに階段から転げおちる。あるいはロパーヒンはこのドラマで最後に桜の園を買い取るすご腕なのだが、思いを寄せるワーリャにプロポーズ一つ切り出せず、あやまって箒でぶちのめされそうになる。深刻な人物までもが後期の戯曲ではボードビルの世界から切り離せない。<sup>iv</sup>

この一段落が記されているのは、同書の第三章「コミュニケーションへの渇き」の1節「ナンセンスな世界」で、「ドタバタ劇」と銘打ってチェーホフの「ボードビル」<sup>v</sup>作品の紹介をした後で、小説や多幕ものの戯曲の中にもヴォードヴィル的な人物が登場するということを述べている部分である。これは浦が意図したことではないが、この部分で、ヴォードヴィル的な人物とされる人々の行動が、トロフィーモフとアーニャのペアをのぞいて、結婚に関わるものであることに注目しておきたい。ついでに述べるなら、この直前には、イワーノフ（チェーホフの戯曲『イワーノフ』の主人公）との類似からアンドレイのことが述べられ、その結婚生活について書かれている。ヴォードヴィル的な人物について結婚というモチーフを結びつけて書かれているのである。それでは、チェーホフのヴォードヴィル作品の場合、結婚はどのように書かれているのだろうか？

<sup>iv</sup> 浦雅春『チェーホフ』岩波新書 2004年 144頁 なお浦は「ボードビル」という表記を用いているが、筆者は本来の音を優先して「ヴォードヴィル」と表記している。

<sup>v</sup> なお、浦の原文ではボードビルはルビの方で「笑劇」という言葉にこのルビが付されている。

## チャーホフのヴォードヴィルの場合

チャーホフの作品の中でヴォードヴィルと呼ばれるのは次の6作品である。『熊』(1888年)、『結婚申し込み』(1888年)、『心ならずも悲劇の主に』(1889年)、『結婚披露宴』(1889年)、『創立記念祭』(1891年)、『たばこの害について』(1886, 1890, 1902年)<sup>vi</sup>

それでは、これらの作品では結婚のモチーフはどのように現れているだろうか。

表題からは分かりにくいのだが、『心ならずも悲劇の主に』と『たばこの害について』はともに、恐妻家の話と言えるかもしれない。前者では、トルカチョーフが友人のムラーシュキンのもとへ「ピストルを貸してくれ」と言ってやって来ることから物語が始まる。その様子にただならぬものを感じたムラーシュキンが理由を聞くとトルカチョーフが説明を始める。初めは役所勤めでの不満を話しているのだが、次第に家庭生活の話になる。所謂別荘族であるトルカチョーフは、仕事のために町に出てくると、いろいろと買い物を頼まれると言う。それも妻からだけでなく、近所の家からの買い物まで引き受けないといけない。そして、彼の話は妻との結婚生活的不满へと変わっていく。充分語ったところで、ムラーシュキンに「ピストルを貸してくれないなら、せめて、同情してくれ」(C.12 ст.104)と言うのだが、ムラーシュキンは飛んでもないことを言い出す。トルカチョーフの別荘の場所を知って、近くに知り合いが住んでいるので、そこへちょっとした品物を持って行ってくれと言うのだ。ついにトルカチョーフは「血が欲しい」と言って、ムラーシュキンを追いかけ回す。トルカチョーフが自分の生活について語る部分は、かなり長い間、モノログと

<sup>vi</sup> 6作品がヴォードヴィルにあたるというのは、題名の日本語訳とともに浦の指摘に従っている(前掲書 140頁)。また括弧内の年号も浦の著作から取っているが、『たばこの害について』に年号が複数あるのは、発表の後、書き換えられているからである。ただし、30巻全集の注からは、1890年ではなく、1889年ではないかと思われる。また、物語については、いずれも30巻の全集に収められているものからあらすじをまとめている。『熊』と『結婚申し込み』が第11巻、『心ならずも悲劇の主に』、『結婚披露宴』、『創立記念祭』が第12巻、『たばこの害について』が第13巻に収められている。

なっている。そのモノログで全体が書かれているのが、『たばこの害について』である。

この作品は、「たばこの害について」という題名で話をするよう妻から命令された男の話であるが、たばこの害について話をするのはごくわずか、ほとんどの時間を妻との生活、その耐えがたさを話すことに費やす。そして、舞台裏に妻が来ていることに気づき、「なかなか威厳のある態度であったと妻に言ってくれ」と聴衆に頼んで話を終える。この2作品には、後の<sup>vi</sup>本格的な作品の中に出てくる「失敗した結婚」のモチーフが感じられる。

また、『創立記念祭』にもこのモチーフが感じられる。N総合信用組合は今日が創立記念日である。取締役会長のスピーチンは準備に余念がない。しかし、そこへ妻のタチャーナがやって来る。さらにここは別の職場を首になった夫の給料を求めてメルチュートキナという老婆がやって来たために、大混乱に陥る。最後はタチャーナもメルチュートキナも倒れたところに組合のメンバーがやって来たために（特にメルチュートキナはスピーチンの腕の中に倒れていたために）、メンバー達が「後ほど来たほうがよいみたいです」（C.12 cr.220）と当惑しながら出て行くところで幕となる。二人の女性がやって来る前にスピーチンが部下のヒーリンに「あなたが何故女性をそんなに憎むのか分からない」（C.12 cr.208）と言っていただけに、この仕事の大混乱ぶりは余計笑いを誘うのだが、ここでの「失敗した結婚」のモチーフの裏には、チェーホフの、結婚が仕事を阻害する要因となるのではないかという恐れが感じられる。

結婚に対する、憧れと恐れという作家のアンビバレントな気持ちが感じられる作品が『結婚申し込み』と『熊』である。『結婚申し込み』という、表題の日本語訳には「結婚」という言葉が現れている。ローモフは隣人のチュブコーフのもとへめかし込んでやって来る。二人とも領地を持つ地主である。ローモフはチュブコーフに娘のナターリヤを嫁にもらいたいと言い出す。もしや借金の申し込みではと恐れていたチュブコーフはそれを聞いて喜んで、娘を呼んで

<sup>vi</sup> ただし、今回参照した『たばこの害について』のテキストは1902年の版であり、30巻の全集では、時代的に『桜の園』の前に置かれている。

ローモフと二人きりにする。ところが、結婚の話は出ず、領地をめぐる言い争いになってしまう。その声があまりに大きかったために、父親は戻ってくると、話を聞いて、彼も娘に加勢する。そこでローモフが出て行ったところで、娘に「あいつはおまえにプロポーズするためにやってきたんだ」(C.11 頁.323)と告げたために、娘の方は慌てる。彼女も実は気があったのだ。そこで再び二人きりになるのだが、今度は、持っている犬の評価でけんかを始める。父親も再びやってきて、今回も娘に加勢する。その最中、もともと体調が悪いと言っていたローモフが倒れてしまう。親子は慌てるが、ローモフは息を吹き返す。父親は娘が結婚を承諾したことを告げるが、若い二人はさらにけんかする姿勢を見せるところで幕となる。

ドタバタ劇である。だが、その底に、作家の結婚へのアンビバレントな気持ちも感じられる。『熊』の場合は、未亡人のポポーヴァとスミルノーフの話である。スミルノーフは、ポポーヴァの亡くなった夫に金を貸していたとかで、銀行に利子を払わないといけないうえにその金を返して欲しいとやって来る。ポポーヴァの方は、今は持ち合わせがないので、明後日まで待つて欲しいと答えるが、スミルノーフの方は、金が必要なのは今日であると譲らない。その議論がずっと続いて、ついにはスミルノーフが決闘だと騒ぎだすのだが、ポポーヴァの方も2丁の拳銃を持ってきて使い方を教えろと迫る。その姿を見て、スミルノーフはポポーヴァに惚れてしまい、二人がキスをしているシーンを使用人達が見ているところで幕となる。こちらもドタバタである。

残りの一つにも「結婚」という言葉が題名に入っている。『結婚披露宴』である。この作品は、6つのヴォードヴィルの中で、もっとも登場人物が多く、喜劇性が強く感じられる。アプロームボフがダーシェニカと結婚するという披露宴、ダーシェニカの母親、ナスターシャは、将軍が来るのを待っている。箔を付けるためなのだが、なかなか現れない。披露宴は、アプロームボフが持参金についてナスターシャに尋ねたり、彼がプロポーズする前に花嫁につきまっていた男が招待されていたりなど、奇妙な場である。乾杯が始まり、少し遅れて、本当は将軍よりは地位が低いレヴノーフが将軍として現れる。彼のスピーチは海軍育ちであるために、船の話になってしまい、理解できる参列者はいな

い。とうとう、彼が本物の将軍ではないことがバレ、一方、彼の方は仲介したニューヒンが、実はナスターシャから将軍への謝礼を受け取っていたということを知り、怒って出て行く。そんな中で婚礼介添人が慌てふためいて列席者に呼びかけようとしているところで幕となる。

以上、見てきたように、チェーホフのヴォードヴィル作品には、何らかの形で結婚のモチーフが現れている。もっとも、多くの場合、「失敗した結婚」というモチーフで、「不発に終わる恋」というものはあまり見られない。では、多幕ものの戯曲に現れる「不発に終わる恋」というモチーフはどこから来ているのだろうか？

## ゴーゴリの『結婚』との関係

1889年の2月、チェーホフはコルシユー座の公演でゴーゴリの『結婚』を見て、スヴォーリン宛ての2月20日の手紙で次のように書いている。

昨日、ゴーゴリの『結婚』を見た。優れた戯曲だ。本筋（действие 筆者注）が無秩序なほど長いが、そのことが戯曲の驚くほど優れた美点により、ほとんど感じられない。（П. 3 ст.160）

同じ年には、ゴーゴリが偉大なロシアの作家であると述べる中で、「『結婚』においては、第3幕が一番劣っている」（П. 3 ст.202）<sup>111</sup>などと書いている。

この戯曲へのチェーホフの好みがもっとも読み取れるのが、1903年1月7日付けのオリガ＝クニツペル宛の手紙である。この手紙の中でチェーホフは、モスクワ芸術座から上演を検討している戯曲のリストを受け取り、それについて意見を書いている。リストの中にオストロフスキーの『どんな賢者にもぬかりはある』があって、「この戯曲は芸術座には全く不向きである。というのは、こ

<sup>111</sup> もっとも、現行のゴーゴリ全集に収められている『結婚』には2幕までしかない。チェーホフは акт という言葉を使っているが、現行の版では действие が2までである。チェーホフの記憶違いであろうか。

れはロシア化された『タルチュフ』じゃないか」(П.11 ст.114)と述べた後、「祝日の公演用に？ ゴーゴリの『結婚』を上演するのよいいのではないだろうか。魅力的な上演にすることができる」(同頁)と書いているのである。

全集の注によれば、チャーホフは、見つかっていないダンチェンコ宛の手紙で『結婚』の上演をアドバイスしたらしい。そして1月17日にダンチェンコから返事が届き、そこには「我々の劇場は舞台芸術という意味で（或いは可能ならドラマ芸術という意味でも）他の劇場の前を行かねばならない」「同じレベルのものをやるなら我々は存在する必要がない」「『結婚』を取り上げて何を創造することができるのだろうか？ 『検察官』だってどうだろう？ 両作品の素材は文学的にも舞台的にも汲み尽くされているように思われる」「1年間に上演できる5作品のうち3作品で食えたと分かっていたら『検察官』を推薦するかもしれない」(П.11 ст.422)などつれない言葉が書かれていた。

『結婚』のあらすじについては、すでに述べた。いよいよ結婚となった時に、あれこれとその先を考えて窓から逃げ出してしまう男が描かれている作品をチャーホフは好んでいたのである。価値のある新しい芝居を上演したいと思ったダンチェンコに対して、喜劇を好んだチャーホフ。モスクワ芸術座とのやりとりの中で、例えば、『桜の園』を悲劇的に演出しようとする芸術座に対し、喜劇性を主張するチャーホフの姿までもが思い出される。ただし、チャーホフが本当にヴォードヴィル的な作品一辺倒で行こうとしていたのか、それは即断はできないと思われる。最後に、それと関連して、フランスのヴォードヴィルとチャーホフを比較した研究を見ておこう。

1990年の3月にパリで開かれた国際シンポジウムの論文集『チャーホフとフランス』の中に「フランス演劇と初期チャーホフ戯曲」を寄せているアミール・シュヴレルは、その中で「ついでに言及をしておく、フランスのヴォードヴィルには当たらないことだが、チャーホフ的な女性嫌い (misogynie) というものがある」<sup>\*</sup>と書き、以下、チャーホフのこれらのヴォードヴィル作品の

---

\* «Чеховиана Чехов и Франция» ст.209

女性の登場人物たちの強烈さについて述べている。

浦はチェーホフの作品の登場人物達のヴォードヴィル性について語っていた訳だが、フランスのヴォードヴィルを見慣れた研究者の目には、これらの作品は、ヴォードヴィルとしてはかなり異質に見えるようである。アミアールーシュヴレルはまた次のようにも書いている。

このロシアの作家は、登場人物の社会的性質を掘り下げている。我が国のヴォードヴィルで(見られるの)は愉快だが、皮相的という性質であるが、彼は環境の卑俗さ(пошлость)と人間の置かれた状況のもろさを強調する。(同書 212頁)

チェーホフの戯曲には、ロシアの演劇史の中で多く見られる「失敗した結婚」のモチーフや「不発に終わる恋」のモチーフが見られる。それはヴォードヴィルを起源としているものもあるであろう。しかし、そこにはさらにヴォードヴィルとは異質のものが存在している。特に「不発に終わる恋」の場合には、もしかするとチェーホフ自身の結婚観も反映しているのかもしれない。

## 参考文献

А.П.Чехов Полное собрание сочинений и писем в 30 томах, М.: Изд-во Наука. 1974-1983

Claudine Amiard-Chevrel"Le théâtre français et les pièces de jeunesse de Tchekhov", в книге «Чеховиана Чехов и Франция», М.: Изд-во Наука. 1992

浦雅春『チェーホフ』 岩波新書 2004年

ノースロップ・フライ『シェイクスピア喜劇の世界』 石原孝哉, 市川仁訳 三修社 2001年